

## ロシア正教会の朝鮮宣教史

清 水 伸 子

- 0 はじめに
- 1 ロシア正教会略史
  - 1-1 ロシアのキリスト教受容
  - 1-2 教会と世俗権力との関係
- 2 ロシア正教徒の各地への広がり
  - 2-1 分離派の発生
  - 2-2 アメリカ正教会の誕生
- 3 朝鮮での宣教開始の経緯
  - 3-1 シューイスキーによる発案
  - 3-2 ウィッテの朝鮮宣教提唱
- 4 朝鮮での宣教活動初期
  - 4-1 最初のつまずき
  - 4-2 ソウル領事館での宣教開始
  - 4-3 日露関係の緊張
  - 4-4 日露戦争開始直後の宣教活動
- 5 朝鮮での宣教活動中期
  - 5-1 日露戦争直後の宣教活動
  - 5-2 ロシア革命時の宣教活動
  - 5-3 ロシア革命直後の宣教活動
- 6 朝鮮での宣教活動後期
  - 6-1 ボリシェヴィキ政権からの権利要求
  - 6-2 ハルビンの分離派からの権利要求
  - 6-3 東京教会管轄下からのソウル教会の分離
  - 6-4 第2次世界大戦後のソウル教会
- 7 結び

## 0 はじめに

20世紀始めにカトリックやプロテスタントに遅れてロシア正教会は朝鮮宣教を開始したが、その活動はロシア正教会内の事情と歴史に翻弄されたといえる。様々な災難に遭いながらも活動を続けていたソウル教会は第2次世界後にロシア正教会の手を離れてしまう。従来、朝鮮宣教の詳しい経過は知られていなかったが、1999年にロシアを訪問をした韓国大統領キム・デジュンがロシア正教会総主教アレクシヤ2世と会見したことで、朝鮮宣教史の研究が注目を浴びるようになった。ロシア正教の朝鮮宣教にはその地理的および時代的背景から日本も深く関係している。

本稿では、発表されたばかりのロシア側の資料に当時の日本を含む極東アジア情勢の分析を加えて、ロシア正教朝鮮宣教の歴史を概括する。

## 1 ロシア正教会略史

### 1-1 ロシアのキリスト教受容

ロシア史では、ロシアのキリスト教受容は988年のキエフ公ヴラジーミル公(1015年没)の改宗に始まるとされている。ヴラジーミル公はキリスト教受容に際して、事前にカトリックとビザンチンの教会を調査している。その結果、ビザンチンの正教(ギリシア正教)を受け入れることに決め、ヴラジーミル公自身の改宗に続いて、彼の命令に従いキエフの人を始めとして全ルーシの人々が洗礼を受けた。この後、ロシア人にとってのキリスト教は、タタールのくびきによる苦しみやロシアの公同志の殺し合いによる世情不安の中にあって、民族の繋がりの唯一のよりどころであり、教会は常に民衆とともに苦しみを分かち合う存在となっていくた。

当初、ロシア教会はコンスタンチノーブル総主教座管轄下に属する一地方教会であったが、時とともにロシアの地に総主教座を置きたいとの願いをロシア人は持つようになった。1453年コンスタンチノーブルが異教徒の

手に落ちると、ロシア人はこれを、1439年の会議における東西両教会の決定を神が祝福しなかった証拠であると考えた。そして、1472年にビザンチン皇帝コンスタンチヌス 11 世の姪とモスクワ大公イヴァン 3 世が結婚するに至り、ロシア人はロシアこそビザンチン帝国の正統なる継承者であると考えようになる。

その後、1588年にギリシア正教会の総主教であるコンスタンチノーブル総主教エレミアス 2 世が寄進を求めてロシアに来ると、ロシア人はこの好機を逃すことなく粘り強く交渉し、1593年に聖なる使徒によって定められた4つの総主教座であるコンスタンチノーブル、アンティオキア、アレクサンドリア、エルサレムに加えて、モスクワを5番目の総主教座として認めさせている。

こうして、ロシア人は、モスクワは第3のローマにして最後のローマであるとの自負心を強めていく。そしてこの自負心は17世紀のニコン総主教の宗教改革の際の分離派の発生の一因ともなるのである。

## 1-2 教会と世俗権力との関係

ロシアのキリスト教受容以来、教会と支配者との関係は主従の関係ではなく、まるで兄弟のような関係であった。良き支配者とは信仰の良き実践者であり、教会は支配者に助言を与えたり、支配者を励ましたりする存在であった。同時に、教会は民と支配者と共にタタールのくびきの苦しみを分かち合う存在であった。その関係が次第に変容してくのが16世紀から18世紀にかけてであった。

教会と世俗権力の兄弟関係は、ヴァシーリー 3 世（在位 1503 年～1533 年）の治世に均衡が崩れる。彼は子供に恵まれなかったため離婚して別の女性と再婚しようとした。正教では離婚は認められていなかったが、教会の一部のグループ（所有派）が世情の安定のためには支配者の後継者問題の解決が第一であるとし、離婚を認める見解を示した。ヴァシーリー 3 世は、この所有派を重用し非所有派を退け再婚を果たす。このことは、ツァー

はロシアの保護者としての責任を負う存在であると教会が認めたことになるのであるが、同時に支配者のためには教会の決まりも破られるとの解釈を生んだ。そして、この考え方が、ツァーが教会も含めた全ての上に立つ存在であることを認めることにつながっていった。

そして、教会が完全にツァーの支配下に置かれるのは、ピョートル大帝（在位 1672 年～ 1725 年）の治世であった。このエネルギーで西欧かぶれの支配者は、その在位中にありとあらゆるものをものすごいスピードで西欧化した。その中に教会制度も含まれていた。何度かの西欧諸国視察を通して、西欧の君主は教会もその支配下に置いているのを見てきたピョートル大帝はロシアにおいてもそれを実現させようとする。1700 年に 10 代目総主教アドリアンが死去すると、後任を選出することを認めず、ツァー寄りの司教をうまく利用しながら教会を隷属させていった。最終的にピョートル大帝は、モスクワ総主教座を廃止し、シノド（宗務院）制を敷き、教会をツァー直属の世俗大臣であるシノド長の下に置いた。そして、シノド長の承認・許可無くしては、決定はおろか討議さえも一切認めないとし、シノド構成員の任免権自体もツァーが握った。これで、教会は完全に世俗権力の下に置かれたのである。このためロシア正教会は海外宣教を始めとして自身の活動に対するヴィジョンを持つことができず、日本や朝鮮への海外宣教は政治主導で開始されることとなる。

## 2 ロシア正教徒の各地への広がり

### 2-1 分離派の発生

1453 年コンスタンチノーブルがオスマントルコの手には落ちた後、ロシア人の中に第 3 ローマ思想が生まれたことはすでに述べたが、ロシアが正教信仰の守護者となるためにはいくつかの問題があった。その一つが、ロシア正教会と他の正教会の儀礼における相違であった。この相違が発生したのは、モンゴル・タタールのくびきの下での東方正教世界との長期断絶の

せいであった。他の正教会が時とともに儀礼の様式を変化させていったのに対して、ロシア正教会はロシアが正教を受容した当時のままの儀礼を保っていたのである。コンスタンチノーブルを失ったギリシア人はロシアの援助に依存していたので、ロシア教会を正面切って批判することはなかったが、ロシアを正教信仰に導いたのは自分達であり、従って信仰と礼拝に関わることは全て自分達ギリシア人が正しいと思っていた。<sup>(1)</sup>

17世紀に総主教になったニーコンは、モスクワが正教信仰の保護者であると内外に認めさせるために、儀礼の統一を試みる。これがニーコンの宗教改革と呼ばれるものであり、全てをギリシア風に改めるという改革であった。この改革の具体的な内容は、例えば十字は2本指ではなく3本指で切るといった内容であったが、ロシアの伝統こそが正統であるとの考えから改革に従わなかった人達にニーコンは迫害を加える。ここにロシア正教は分裂し分離派が誕生する。分離派教徒は迫害を逃れて、または流刑をされたりしてシベリアへと広がっていくのである。

分離派は古儀式派とも呼ばれ、19世紀には沿海州や日本にも住んでいた。(中村 1997) 後で述べるように、ロシア革命でモスクワの力が弱まると彼らは勢力を強め、ソウル教会を支配下に置こうとする。

## 2-2 アメリカ正教会の誕生

教会はピョートル大帝の治世に世俗権力の支配下に置かれたとすでに述べたが、ピョートル大帝の抑圧政策とその後のエカチェリーナ2世の教会迫害によっても多くの修道院が閉鎖され土地が没収された。しかしながら、その結果、多くの修道士たちが各地に散って行くこととなり、その一部の宣教活動に熱意を持った修道士達の活動により逆に正教信仰は広がって行く。

19世紀には宣教師ヴェニアミノフ(1797年～1879年)がアラスカで宣教活動を展開し成果をあげている。彼は1838年にカムチャッカおよび千島・アリューシャン列島の司教に命じられる。彼はこの最も過酷で住みに

くい地域において、島から島へと渡って行きながら改宗者を増やし、かつ増加していく信者を導いていった。彼のこの宣教活動に対する情熱は本国でも認められ、1868年にモスクワ総主教に選出されている。

ロシア正教の宣教活動は、新しく改宗した人々の民族的アイデンティティーに常に配慮する方法を取っていた。宣教師達は宣教を始めるとすぐにその民族の言葉を習得し、聖書や祈祷書を彼らの言葉に翻訳している。文字を持たない人々に対しては、彼らの彫刻や刺繍などから借用した記号を使って翻訳したと言われている。(ゼルノーフ 1978) 非キリスト教国のキリスト教会定着の経過をみると、歴史的にはどの国の教会も一時的にせよ民族教会としての独立性が強くなる。ロシア正教宣教の地はロシア正教の総主教座から遠く離れていたことと、この改宗者の民族的アイデンティティーへの配慮のために、ロシア正教宣教師たちから正教の信仰が伝わったのにもかかわらず、却って母体であるロシア正教会との関係が早く希薄になりやすかったのではないかと考えられる。もちろん、分離派の広がりとして20世紀の歴史の流れも関係するのであろうが、ヴェニアミノフのアラスカ宣教開始からわずか34年後の1872年にはサンフランシスコに主教座が、1905年にはニューヨークに総主教座が置かれたのである。ヴェニアミノフの蒔いた正教信仰の種は、ロシア正教会から独立したギリシャ正教アメリカ教会へと成長していった。

第2次世界大戦後のソウル教会帰属問題は米ソ対立のためにこのアメリカ正教会が関わってくる。

### 3 朝鮮での宣教開始の経緯

#### 3-1 シューイスキーによる発案

朝鮮への宣教開始のイニシアチブを取ったのは、ロシア正教会自身ではなく、当時のロシアの外交官や政治家達であった。実は、これはロシア正教が日本宣教を開始したいきさつと似ている。<sup>(2)</sup>

朝鮮宣教の必要性を最初に論じたのは、当時ロシア領事館の書記官として朝鮮に赴任していたシューイスキーであった。彼は、1889年春にサンクトペテルブルクの外務省宛ての文書の中で次のように書いている。

…ロシアの国益にとっての朝鮮の地理的および政治的意味は、我が国の隣国である二つの列強、中国と日本が今後間違いなく強大化することを考えれば、その重要性は益々大きくなっていくであろう。それゆえ、我々は、いかにしてロシアが朝鮮に対して文化的影響力を持ち得るのかということを考えねばならない。なぜなら、文化的影響力を持つということは、政治的影響力を持つことの基層をなすものだからである。……………

彼は、ロシアが朝鮮に文化的影響力を持ち得る手段として、「商工業上の取引および関係の構築」と「学術的交流」および「宣教による宗教的感化」を挙げている。しかしながら、彼は、この3つの方策を挙げながらも、実際には、既に活動していた中国でのロシア正教宣教の資金を回してでも朝鮮宣教を開始するべきであると強く主張している。

彼のこの主張には大きく2つの理由があった。まず第一に、朝鮮に目を向けたのが他の諸外国に比べて遅かったため、後発国となるロシアは商工業上の関係や学術交流といった点で他の欧米諸国にはかなわないとシューイスキーが考えていたこと。そして第二に、情報収集の観点からいって、文化的背景が全く異なる国においては一般民衆の中で暮らす者からのみ生きた情報が入手できると、シューイスキーが考えていたからである。

朝鮮では既に各国のカトリックやプロテスタント宣教団が布教活動をしており、シューイスキーは、プロテスタントやカトリックが朝鮮人信者を獲得しているのを目の当たりにしている。長く農奴制を保ってきたロシアの政治的後進性を考えると、宣教という宗教上の点においてのみロシアは諸外国に引けを取らないと彼は思ったのかもしれない。というのも、シューイスキーは、この当時すでに朝鮮とロシアの国境地帯にはロシア正教へ改

宗した朝鮮人がかなりいたことを知っていたからである。国境地帯にさほど人が住んでいなかったこの時代は、朝鮮人は比較的自由に国境を超えて移住してきたようである。特に 1860 年代頃からは、朝鮮半島の大飢饉や支配者の圧政が原因となり、多くの朝鮮人が国境を超えて中国およびロシアへ移住し始めた。その移住者の数は数百万人規模といわれている。記録によると<sup>(3)</sup>、ロシア政府は領内への移住者を定住させるべく、朝鮮人の定住村を整備するなどして、援助を行っている。加えて、1856 年には、アムール河からウスリー川の南にいたる範囲での宣教活動の開始がシノドによって決定された。この決定以後、各村々で、学校などの開設とともに、正教会の教会が建設されている。正教会神父が各村を回って行った礼拝や説教などの宣教活動により、1873 年ごろにはその前後わずか 2～3 年の間に 2038 名の朝鮮人がロシア正教の洗礼を受けたとの記録が残っている。1904 年にはウスリー川南に 9000 人近くの朝鮮人ロシア正教徒がいたようである。こういった事情も、シューイスキーが朝鮮宣教を強く主張した根拠の一つであろう。シューイスキーは、儒教、仏教、シャーマニズムという 3 つの宗教が支配的な朝鮮での宣教は容易ではないとしながらも、国境近辺とソウル近郊から布教するべきであるとの意見を述べている。このシューイスキーの意見に、当時の北京領事クマンも賛同し、極東地域でロシア人と朝鮮人の宣教師のための学校を建てるべきであると、外務省アジア局に電報を打っている。

ロシア外務省は 1889 年 10 月にロシア正教の朝鮮宣教について審議し始めた。一時は、実施に関する具体的な内容まで議論されていたのであるが<sup>(4)</sup>、結局頓挫してしまう。これは、ひとえに、ロシア正教会トップが当時国内のことで手一杯で、朝鮮宣教に興味を持たなかったためであった。朝鮮宣教が具体化するのには、この 7 年後に大蔵大臣ウィッテが極東政策の一環として朝鮮宣教を提唱するまで待たねばならない。



## 3-2 ウィッテの朝鮮宣教提唱

ウィッテは大学卒業後に民間鉄道会社に就職して経営の手腕を発揮し、1888年に大蔵大臣ヴィシネグラツキーによって大蔵省鉄道事業局長に抜擢された。その後、1892年2月に交通大臣、同年8月にはヴィシネグラツキーの後任として大蔵大臣となり、皇帝アレクサンドル3世が1891年に宣言したシベリア鉄道建設に取り組むこととなった。ウィッテは、もともと一貫して鉄道関係の仕事に携わってきたのであるが、世界経済の中でのロシアの地位を変えるためにロシアはアジアに目を向けるべきであるとの考えを彼自身が持っていた。そして、日清戦争（1894年～1895年）後、ウィッテは極東政策を強く主張し始めるのである。その一つが、朝鮮宣教であった。

1896年12月に大蔵省事務局からアジア局長のもとに1889年のシューイスキーの提案に関して詳しい調査および見積もりを依頼する文書が届いた。翌1897年2月にアジア局長は資料と共に返事を大蔵省に送っている。ウィッテはアジア局長の返事を受け取ってすぐに朝鮮宣教を決め、同年7月には宣教に必要な予算まで決定している。シューイスキーの提案の中では北京宣教の予算を回してでも朝鮮宣教をとのくだりがあったが、ウィッテは北京宣教の予算は減らしていない。シベリア鉄道建設をはじめ、様々な国内の問題を抱えたロシアの財政事情は苦しかったはずであるが、朝鮮宣教の予算を純増で用意したという点からいっても、ウィッテは極東政策としての朝鮮宣教を非常に重視していたと言える。

外務大臣ムラヴィヨフは、大蔵大臣ウィッテより送られた文書で初めて朝鮮宣教決定を知ることとなる。ムラヴィヨフは、朝鮮宣教決定に際して外務省がかやの外に置かれたのを不満に感じつつも、朝鮮宣教自体には賛成の意を表明した。しかしながら、ムラヴィヨフは、朝鮮宣教実施の主導権を外務省が握るために、シノド長サブレルに朝鮮宣教はもともと外務省発案である旨の文書を送っている。1897年7月、ムラヴィヨフは、シノド長サブレルより朝鮮での教会建設等の宣教活動は外務省に一任するとの返

事を受け取っている。これで一応、外務省の面子がたったわけである。ムラヴィヨフは、その後すぐに朝鮮総領事シュペイエルにその旨を通知し、すみやかにソウル宣教に着手し教会建設用の土地の選定に取りかかるように命じた。

そしてシノドは 1897 年 10 月にピースキー神学校のアンヴロシー神父を朝鮮宣教の長に任命している。

これで順調に朝鮮宣教が開始されたかというところ、そうではない。外務省主導で進められていた宣教開始の準備に、大蔵大臣ウィッテが関わり、かえって混乱が生じたからである。また、同じ頃、朝鮮宣教に関わっていた政治家らが失脚し、その後任に就いたのが朝鮮宣教に消極的な人達だったからでもある。

## 4 朝鮮での宣教活動初期

### 4-1 最初のつまずき

外務大臣ムラヴィヨフから早急に教会建設用の土地獲得の命を受けた朝鮮総領事シュペイエルは、土地の選定に取りかかるのであるが、この土地取得がなかなかうまく行かなかった。なぜなら、ムラヴィヨフは、宣教を開始するに当たり、最初の段階から土地は借地ではなく購入するべきであると主張し、シノドもそれを認めていたのであるが、実際には土地購入の資金のめどが立たなかったからである。そこで、シュペイエルは朝鮮王朝から土地を寄付してもらえないかと考え、朝鮮側に働きかけていた。

こういった事情で遅々として進展しない朝鮮宣教に業を煮やし、朝鮮宣教に関心を抱きつづけていたウィッテは自ら手を下す。ウィッテは教会付属の学校を設置するために輔祭の空席の賃金を流用する許可を皇帝ニコライ 2 世から取りつけたのであった。これを知ったムラヴィヨフはシュペイエルに土地取得に本腰を入れて取り組むよう再度命令している。

こうして、外務省と大蔵省がばらばらに教会用地の取得に奔走すること

となる。朝鮮宣教の主導権を持つことに何らかのうまみがあったとは考えにくい。この背景には、三国干渉や旅順占領といった政策面をはじめとする当時の大蔵大臣ウィッテと外務大臣ムラヴィヨフの政治的対立が波及したものであろう。教会用地取得の任にあたったのが、外務省の朝鮮総領事シュペイエルと大蔵省事務官アレクセエフであった。その後、シュペイエルの朝鮮王朝への働きかけが功を奏して、土地が無償で手に入るめどが立つところまで進展した。

1898年3月上旬には、前年にシノドより朝鮮宣教の長に任命されているアンヴロシーも含めた宣教団メンバーが朝鮮入りするために長崎に到着した。ところが、彼らはそのまま朝鮮入りすることができず、ウラジオストクに移り1898年末まで同地に足止めされる。

この直接の理由をはっきりとしない。表向きはシュペイエルの後任として朝鮮総領事となったマチューニンが土地取得に関して手続き上問題があると指摘したからとされているが、そのためにマチューニンが宣教団メンバーの朝鮮入り自体をストップさせたのにはもっと別の理由があると思われる。というのも、例えば日本宣教のために来日したニコライ神父は元々領事館付きの神父として日本にやってきて正教会の教会などない状態で活動を始めたのであり、朝鮮でも宣教開始が政府決定されているのであるから、建物がなくても、宣教に関しては宣教師がまずは入国することが先決だと考えられるからである。ロシア人宣教師にとって朝鮮はシベリアを隔てた遥かなたの東の地である。生活習慣も違えば言葉さえも違う土地であるから、朝鮮に初めて入る宣教師達にとっては、教会の建物以前の問題に直面するはずであり、ソウル在住の朝鮮総領事がそのことに気がついていないはずがない。恐らく、根底としてマチューニン自身が朝鮮宣教には批判的な考えを持っていたことが関係しているのではないか。彼自身が宣教団の入国に興味を持っていなかったため、宣教団の朝鮮入りがなかなか実現しなかったのである。この後、宣教師は自力で朝鮮入りを果たすこととなる。

土地に関しては、結局 1898 年 5 月には取得が完了している。しかしながら、1898 年秋には外務大臣がムラヴィヨフからラムズドルフに変わり、シノド長もすでにポベドノフツェフに変わっていた。この二人も朝鮮宣教には消極的または否定的であった。<sup>5)</sup> とりわけポベドノフツェフは、ある文書に、朝鮮の正教信者は極少数であり、外務省が朝鮮宣教に肩入れするのは時期尚早であると書き残している。

長崎からウラジオストクに移った宣教団メンバーのことであるが、朝鮮に派遣されるはずの最初の宣教団メンバーは三人であったが、そのうち二人が朝鮮に入国することなくその任務から降りている。当初、宣教団は团长であるアンヴロシー神父とアレクセエフ神父とクラシン神父の 3 人であった。1898 年春にウラジオストクへやってきた彼らは、ウスリー地域から移ってきたロシア語を話せる朝鮮人から朝鮮語を習いながら、ウラジオストク近郊の海に面した軍用の村に滞在をしていた。しかしながら、まずアンヴロシー神父と住民との間でトラブルが生じ、彼はペテルブルクに呼び戻されてしまった。これは、宣教団長が朝鮮の地を踏むこともないまま解任されるという幸先の悪い出来事であった。アンヴロシー神父がいなくなるとすぐに、今度はクラシン神父も別の任務を引き受けていなくなってしまう。結局、最後に残ったアレクセエフ神父は自ら朝鮮王朝に願いを出し、朝鮮内を自由に移動する許可をもらい、彼だけがロバに乗って陸路を通り、1899 年にソウル入りを果たす。朝鮮に入った最初のロシア正教会神父は、このニコライ・アレクセエフ神父であった。

#### 4-2 ソウル領事館での宣教開始

アレクセエフ神父をソウルで迎えたのは、1899 年春から着任していたパヴロフ新朝鮮総領事であった。前任者とは異なり、パヴロフは朝鮮宣教に対して積極的であった。当時ソウルには 40 名～45 名ほどの正教徒がいたようである。ほとんどが外交官や領事館護衛の任にあたっていたコサックらであったが、南ウスリー地域出身の朝鮮人も 15 名ほどおり、そのため

パヴロフは宣教すれば南ウスリー地域で正教への改宗者が増えるかもしれないという考えを持っていた。また、パヴロフは、どんどん信者を増やして行くアメリカの宣教団に対しての対抗意識も持っていたようである。

ウラジオストクからソウルにアレクセエフ神父が到着したとき、まだソウルには正教会の建物はなかった。パヴロフは、領事館内の一室にアレクセエフ神父が持ってきたイコンを置き教会として使うことをアレクセエフ神父に許可した。こうして朝鮮宣教がソウルで始まったのである。

解任された宣教団長の後任としてフリサンフ・シシエトウコフスキーが任命され、1899年9月にフリサンフ神父がヨアン・レフチェンコ神父と共にソウルにやってきた。何もしないまま解任された前任者と比べて、フリサンフ神父は宣教初期の段階で何もない状態から実に精力的に多くのことをやり遂げていった。<sup>(6)</sup>

まず、フリサンフはアレクセエフが持ってきたイコンを配置してイコノスタシスをつくり教会としての体裁を整え、定期的に説教を行った。ソウル入りした翌年1900年10月には、朝鮮人の子供のための学校を開き<sup>(7)</sup>、1903年4月には教会を建設し領事館内の仮の礼拝堂を移している。また、ソウル以外の土地にも宣教活動を広げており、ソウルからおよそ50キロ離れたムンサンという街でも宣教活動を行っている。1903年には、教会拡張等の資金の必要性や人員不足を政府に訴え、30000ルーブルもの特別予算を政府に認めさせている。

ロシア正教の朝鮮宣教は、今まで見てきたように、政治主導で1900年に入ってやっと本格的に始まったのであるが、すぐにロシア正教会の朝鮮宣教の未来にとって不吉な出来事に直面する。日露戦争である。

#### 4-3 日露関係の緊張

19世紀の日本に接触した当時のロシアが持っていた日本に対する思いは、他の列強諸国の東アジアに対する帝国主義的政策と日本の大陸進出のために次第に変質していった。最終的に両国が衝突する理由となるのが朝

鮮に対する両国の思惑であり、しかも、ロシア正教の朝鮮宣教開始直後の頃のことであった。

日本が長い間鎖国をしていた間、列強諸国は日本との自由な貿易を強く望み、それが 1853 年の突然のペリーの浦賀来航により現実化する。何の軍備も持たないまま鎖国をしていた日本にとって、突然の軍艦での来航の脅しは、鎖国を続けていけるような時代ではないということを日本に自覚させ、これが日本の開国につながった。

しかし、他の列強諸国に比べてずっと以前から強く日本との通商貿易を望んでいたのは実はロシアであった。ロシアでは、18 世紀にはすでに盛んであったシベリアおよびベーリング海峡付近での毛皮採取のために、日本での水や食料の補給を強く願っていたのである。

イエルマークのシベリア遠征以後、ロシアは 17 世紀半ばには太平洋やカムチャッカ半島東端に到達していた。シベリアは、極寒の何の生産性もない土地であったかというところではなく、シベリアに生息するキツネやアザラシをはじめとする毛皮貿易で多くの富みをもたらす土地であり、18 世紀にはその中継地としてのイルクーツクにはコサックと共にかなりのロシア人商人が住んでいた。毛皮商人達にとっては毛皮猟のための食料確保は最重要課題であり、そのため日本との通商開始を強く政府に働きかけていた。日本との交渉のためにはまず通訳が必要であると考えた政府は、しばしばシベリアに漂着する日本人漂流民を保護する皇帝勅令を出す。当時、漂着した漂流民は土着民に殺害されていたからである。その結果ゴンザやソウザ、大黒屋光太夫らが生き伸び、首都サンクトペテルブルクまではるばるシベリアを超える旅をすることとなるのである。1736 年には世界初の日本語学校がロシアに開設されている。

ペリーの浦賀来航から一ヶ月遅れて長崎にプチャーチンが来航したのであるが、これは、1792 年のラクスマン、1804 年のレザノフに次ぐ 3 人目のロシア使節であった。1853 年にプチャーチンを全権大使として日露会談が開始され、和親修交、国境確定などの交渉が行われ、1855 年には最初の

日露通好条約が締結される。この二年半におよぶ日露交渉はメンシコフ海軍総司令官がプチャーチンに要望した通り平和的手段で行われ、国境確定に関してはエトロフ島以南は日本領、ウルップ島以北はロシア領と決定され、サハリンに関しては従来の慣習に従うとし国境の確定はなされなかった。

ロシアは、1858年愛琿条約でアムール左岸の地を、1860年に北京条約でウスリー川右岸のウラジオストクを含む沿海州の地を正式に獲得し、国境を確定した。着々と南下を続けていたロシアは、1859年にシベリア総督ムラヴィヨフを日本に派遣して、サハリンの領有に関する交渉を行っているが、サハリン全島またはその半分の領有を主張する日本側との間で交渉は決裂している。結局、1875年にウルップ以北の千島列島とサハリンの交換条約が締結された。この時、南下政策をとっていたロシアには、千島列島を日本に取られたという思いが残った。

シベリア鉄道は1891年に国家的事業として始まり、ウラジオストクからハバロフスク間が1897年に完成、他方西シベリアの鉄道建設も同時進行で行われ、1900年には鉄道を使つてのシベリア往復がほぼ可能になるほどのスピード建設であった。一方、大蔵大臣ウィッテは中国清朝と交渉し東清鉄道の敷設権を獲得し、1897年から1903年でウラジオストクまでの満州における直近線の建設を完成させる。このシベリア鉄道建設はロシアに対する恐怖心を日本に与えた。ロシア軍の南下かつシベリア鉄道の完全開通、および日本の朝鮮支配といった要因が重なり日露戦争に突入していくのである。

朝鮮側の状況を見ておくと、日本と同じく長く鎖国政策をとっていた朝鮮には、日本開国以来、諸外国の朝鮮を開国させようとする働きかけが強くなる。しかしながら、朝鮮を開国させる突破口を開いたのは、欧米諸国ではなく日本であった。開国を迫る諸外国を強行につっぱねていた朝鮮王朝は、1876年に日朝修好条約を結ぶことを余儀なくされる。これは平和的な方法によってではなかった。日本は、日本が各国とのあいだで結んでいた不平等条約よりもさらに不利な不平等条約を朝鮮に結ばせる。その後、

朝鮮は他の諸外国と修好条約を結ぶこととなる。当時力の無かった朝鮮王朝は、欧米諸国の餌食とならないよう、中国側に付こうしたり、また中国が干渉を強めてくるとロシアや日本寄りの政策をとったりと、三国の間で揺れており、結局そのためにロシアと日本と中国がそれぞれ朝鮮半島において他国をけん制し合うという状況が生まれた。三国の中で中国が弱体化していくと、日本とロシアの間の緊張が高まり戦争へと発展する。

#### 4-4 日露戦争開始直後の宣教活動

1901年5月20日にレフチェンコ神父が亡くなり、1902年にはヴァルフォロメイ神父、フョードル神父、ドミートリー神父とヤコフ神父が朝鮮入りし宣教団メンバーに加わっている。しかしながら、1903年には、最初に朝鮮入りしたアレクセエフ神父、フョードル神父、ドミートリー神父とヤコフ神父が北京でのロシア正教宣教活動に加わるためにソウルを去った。これは、中国で起こった義和団事件の影響で弱体化した北京教会の立て直しのための人員移動であった。ロシア本国の正教会から新たな神父の派遣もなく、遠く離れた極東地域で正教布教に努めていた神父たちは、少ない人数で資金もカトリックやプロテスタントに比べると十分ではなく、かつ歴史的に難しく混乱の時代にさしかかろうとしている東アジアで宣教活動を続けていた。1903年半ばには、朝鮮のロシア正教会にはフリサンフ神父とヴァルフォロメイ神父の二人が残ることとなったが、この二人を待ち受けていたのが日露戦争開始と共に朝鮮にやって来た日本軍による軍事占領であった。

1904年、フリサンフ神父とヴァルフォロメイ神父は日露関係の緊張の高まりをソウルにおいて感じつつ宣教活動を続けていた。1904年2月に日露戦争が開始されると、日本軍は開戦の6日後にはソウルにいるロシア人に退去命令を出す。当時の様子を語る文書によると、教会を襲ったパニックはかなりのものであったそうである。教会にある礼拝用の聖器などは持ち出せないため預けたり教会の警備を手配した後、二人の神父はチェムリッ



ポ（ソウルより西に8キロほど離れた港町）から上海へと出国をした。このとき朝鮮総領事パヴロフも一緒に出国している。朝鮮宣教団長フリサンフ神父は上海からペテルブルクへと帰っていき、ヴァルフオロメイ神父は自らの意思で当時戦闘が激化していた満州に入り野戦病院で働いている。

こうして、宣教が始まってわずか4年で朝鮮での宣教活動は一旦途絶えてしまう。活動が再開されるのは2年後の1906年であった。

## 5 朝鮮での宣教活動中期

### 5-1 日露戦争直後の宣教活動

日露戦争後には、戦前よりもさらに多人数の宣教団が組織され、ロシア正教の朝鮮宣教が再開される。日本の支配下に置かれた朝鮮に敗戦国ロシアの宣教団が入って宣教を再開することになった理由は、外国の非難をかわすために日本政府がとった懐柔政策による。

新しい朝鮮総領事プランソンは外務省への報告に、朝鮮支配を強めている日本が外国政府の非難をかわすために特に外国人宣教師に対して寛大な態度をとっており、これは朝鮮宣教再開にとって好機であるとしている。本国ロシアでは、大蔵大臣がウィッテからココフツォフに変わっており、ココフツォフ自身は日露戦争後の極東情勢は変化したとして朝鮮宣教には消極的であったようである。しかしながら、朝鮮総領事プランソンの報告に基づいて、1906年にはパーヴェル神父とヴラジーミル神父とさらに満州に一旦出ていたヴァルフオロメイ神父と他三名が宣教のために朝鮮入りした。

このときの宣教団長はパーヴェル神父であった。パーヴェル神父は、急ごしらえではあるが礼拝堂を造り、日々の礼拝や説教を行うと共に、フリサンフ神父がやり遂げられなかった祈祷書の朝鮮語への翻訳を行っている。また、コハを始めとするソウル近郊の村々にまで布教地区をさらに広げ、学校を開設している。1907年には最初の朝鮮人神父ヨアン・カンが、1914

年には A. G. キム神父が誕生している。このころの朝鮮人洗礼者は毎年 100 人ほどあったそうである。

この頃パーヴェル神父は、ロシア正教を根付かせるためにソウルにロシア正教の寺院を建立することを考えている。外国宣教のためでは資金が獲得できないと考えたパーヴェル神父は、日露戦争中に朝鮮で戦死したロシア兵士慰霊のためのロシア正教会寺院建立を政府に訴える。これに対して、ウラジオストクにも戦没者の墓地がないことから、ソウルではなくウラジオストクに造る案が浮上した。結果的にはソウルでの寺院建立は実現しなかった。

1908 年に、それまでペテルブルク総主教の管轄下にあった朝鮮宣教は、シノドの勅令により、ウラジオストク主教の管轄下に移される。このころから、朝鮮宣教に携わっていた神父達は、カムチャッカ教区やウラジオストクやウスリー教区へ移動を命じられソウルから去って行き、朝鮮宣教団メンバーは減っていった。宣教団長パーヴェル自身も朝鮮宣教の責任者を兼任しながら、ウラジオストク教区のニコリスコ・ウスリー教区の司祭としてソウルから去って行くことになる。パーヴェル神父は、朝鮮人改宗者が未だ正教の信仰に完全には目覚めていないという印象をもっており、不安を感じていたようである。

こうしてソウルで朝鮮人洗礼者を導いていくロシア人神父が減っていた頃に、本国ロシアで革命が起こり、朝鮮宣教はその影響を受け始める。

## 5-2 ロシア革命時の宣教活動

パーヴェル神父がウスリー教区の司祭としてソウルを出た後、1917 年にパラデー神父が宣教団に加わる。同年ロシア本国ではロシア革命が起こり、帝政の終焉を迎え、政権を取った革命政府は教会弾圧を開始した。政府主導で始まった朝鮮宣教は、シノドからの資金を失い、ソウル教会はすぐに財政的に行き詰まってしまう。

ソウル教会は規模の縮小を余儀なくされる。ウスリーのパーヴェル神父

もソウルのパラヂー神父も、存続は無理として学校を閉鎖してしまうが、これにより学校で教師として給料を得ていた朝鮮人を始めとする朝鮮人信者とロシア人神父との間に対立が起こる。朝鮮人信者にとっては、ロシアの政局の変化が理解できなかったのである。この対立は深刻なもので、パラヂー神父は結局3ヶ月半で朝鮮宣教から抜けなくてはならなくなった。

### 5-3 ロシア革命直後の宣教活動

パラヂー神父の後任としてフェオドシー神父がソウル入りし、1918年にソウルにいるロシア正教宣教師はルカ・キム神父と A. キム神父の3人となった。本国からの送金を失ったソウル教会は、ソウルの教会の建物を賃貸するか、土地を切り売りするしかなかった。この悲惨な状況は北京教会も同じであったようである。ウスリーにいるパーヴェル神父やウラジオストク府主教エフセヴィーはシノドにソウル教会の窮状を訴えるが、ウラジオストク府主教がソウルを見捨てる気がなければ維持せよとの返事が来るだけであった。このころ朝鮮および日本を含む沿海州地方にいるロシア正教信者は約6000人、そのうち朝鮮だけでは600人ほどであった。

1920年ウスリーにいるパーヴェル神父に代わってソウルにいるフェオドシー神父が朝鮮宣教団長になるが、その直後に白軍と赤軍の内戦のためウラジオストクとソウル間の連絡が取れなくなる。ソウル教会の孤立化を心配したウラジオストク府主教エフセヴィーは総主教チーホンに文書を送り、ソウル教会を東京のセルゲイ・チホミロフ神父の管轄下に移すように1921年に進言している。その結果、1922年6月よりソウル教会の長は東京のセルゲイ神父となるが、実際にはソウルのフェオドシー神父が一身に苦難を背負うこととなる。

## 6 朝鮮での宣教活動後期

ロシア正教の朝鮮宣教は、日露戦争に続いてロシア革命とその後起こる

内戦と第2次世界大戦によって様々な災難が降りかかり、最後にはロシア正教の分派との争いとなり、ソウルでのロシア正教宣教活動は終わりを迎える。

#### 6-1 ポリシェヴィキ政権からの権利要求

ロシア革命後の内戦でポリシェヴィキ勢力は、政権を掌握するとツァーの遺産として教会財産はソビエト政権にあると主張し始めた。また、ソウル教会は、当時朝鮮の実質上の支配者である日本との関係で、全財産を失う可能性もあった。結局、土地などは日本のロシア正教会のものとして登記し、フェオドシー神父は朝鮮人司祭を立ててソウル教会を守った。当時のフェオドシー神父の自己犠牲的な献身で教会は守り抜かれ、かつ十分な活動資金もないながら75名もの朝鮮人洗礼者があったと記録に残っている。しかしながら、1930年に共に布教活動に励んできたルカ・キム神父が亡くなり、フェオドシー神父は東京のセルゲイ神父にソウル教会の責任者の任を解くように願いを出している。フェオドシー神父は、同1930年に東京に移り1933年に東京で没している。(この間の詳しい経緯については、さらに新資料の発見が待たれる。)

#### 6-2 ハルピンの分離派からの権利要求

フェオドシー神父が東京へ去った後、ソウルに残っていたのは輔祭のアレクセイ・キム・キ・ハンだけであった。しかしながら、実際にはロシアからの移民で組織された教区ソビエトが教会を独自に運営をしていたようである。1931年には東京のセルゲイ神父の計らいで、満州よりチスチャコフ神父がソウル入りし、宣教活動を続けた。当時、ソウル近郊を含めて1100人の正教徒がいた。

しかし、ポリシェヴィキ政権の要求を退けたソウル教会は、今度は分離派からの乗っ取りの危機に遭う。1933年ごろからハルピンに移住して生き長らえたロシア正教分離派の一派が在外シノドの設置を宣言し、カムチャッ

カ教区とソウル教区の支配権を要求してくる。ポリシェヴィキ政権からの弾圧でモスクワ総主教の影響力が極東地域まで及ばなくなったため、にわかに分離派の活動が盛んになったのである。セルゲイ神父はこの分離派のソウル入りの動きをなんとか食い止めたが、分離派の宣教師達はハルピンから北朝鮮に入り国境近辺で宣教活動を開始している。

ソウルの宣教活動に従事する人員がさらに必要であると強く認識したセルゲイ神父は、ポリカルプ神父を1936年に東京からソウルへ派遣する。

### 6-3 東京教会管轄下からのソウル教会の分離

1922年よりポリシェヴィキ政権より財産を守るべく東京教会の管轄下に入ったソウル教会は、第2次世界大戦を前に世界から孤立して行く日本の状況下で日本教会から切り離されることを余儀なくされる。

日本政府は戦争に協力させる体制作りのため国内のキリスト教団への締め付けを強めていく。その結果、1940年にセルゲイ神父は東京教会の長の任を降り、日本人司祭が東京教会の長となっている。セルゲイ神父はソウル教会管理権までは日本人司祭に渡さなかったが、結局日本政府の圧力のため放棄せざる得なかった。セルゲイ神父は、ソウル教会を東京教会管轄下からモスクワ総主教管轄下に戻し、1941年10月にソウル教会の全権と財産保護権をソウルにいるポリカルプ神父に渡している。<sup>(9)</sup>しかし、この第2次世界大戦のせいで、ポリカルプ神父は歴代のロシア正教朝鮮宣教に関わった宣教師の中で最も不幸な目に遭うことになる。

### 6-4 第2次世界大戦後のソウル教会

ロシア正教の朝鮮宣教活動は戦後再開された。ソウルのある38度線以南はアメリカの占領下であった。<sup>(10)</sup>ソウルは北朝鮮からの避難民であふれ、教会の建物に避難民が住みつくようになった。北からの避難民の中にはロシアとの国境地帯に一時期住んでいた分離派教徒もいた。

朝鮮に駐屯するアメリカ軍はキリスト教宣教師に寛大であったので、ポ

リカルブ神父はソウル教会立てなおしに着手するが、自分達で教会運営を行おうとする信者らとの間に対立が生じる。この背景にはいくつかの事情があるが、ポリカルブがモスクワ総主教を長と仰ぐ神父であったということと、避難民のなかにモスクワ総主教に対立する分離派が多くいたことも関係していると考えられる。

反ポリカルブ派は、朝鮮人の民族感情を利用して、ポリカルブ神父は日本教会に通じおり、このままでは教会の土地はあの憎い日本のものになると流布する。このころ、日本教会は、1945年に亡くなったセルゲイ神父の後任としてモスクワ教会からの主教派遣を待っていたが、ここで米ソの対立が影響を及ぼす。当時、アメリカとソ連の双方が、朝鮮を自国にとって都合の良い衛星国にしようと目論んでいた。日本教会も、ソ連の影響力を排除したいアメリカの思惑の影響を受ける。GHQの介入のせいでアメリカの正教会からヴェニアミン神父が来日し東京教会の長となると、ソウルの反ポリカルブ派はヴェニアミン司祭の後ろ盾でソウル教会に朝鮮人司祭を置こうとする。

1948年12月に東京に出向いてヴェニアミン司祭にソウル教会長として認められたアレクセイ・キム・キ・ハン神父が、ポリカルブ神父にソウル教会の全権を渡すよう詰め寄っている。ポリカルブ神父の日記によると、警察権力や暴力による脅しもあったようであるが彼はこれを毅然と拒否している。最終的には、ポリカルブ神父のサインがないまま教会は分離派のものになったとの記述がロシア側の資料に載っている。<sup>(11)</sup>

その後、ポリカルブ神父は何度か投獄されたのち、1949年6月29日に38度線まで連行され追放される。

かくして、朝鮮でのロシア正教宣教は途絶えてしまうのである。

## 7 結語

ロシア正教の朝鮮宣教は様々な不幸に見舞われるが、まずその原因の一

つは、ロシア正教会がシノドの下で政治権力に屈していたために、朝鮮宣教が政治主導で始められたことにあった。海外宣教に対する政治的態度の不統一が影響し、朝鮮宣教はそもそもその開始からして大幅に遅れる。そのため生まれたばかりのソウル教会は、まだ力がないまま日露戦争のために2年間中断を余儀なくされる。その後、今度は本国のロシア革命の波に巻き込まれる。政治主導であったため、革命による帝政の終焉で100パーセント依存していた資金を失い、教会の維持は常に財政的に苦しくなった。

この間、ソウル教会の管轄権はウラジオストク教会に移り、さらに東京教会に移ることとなる。これは、ソウル教会がロシア正教総主教座から遠く離れていたためと、本国革命政権や分離派からの支配権譲渡の要求をかわすためであった。しかし時と共に、東京教会と関係を持ったことも、抗日運動が激化していく朝鮮に残ったロシア人神父にとって不幸の元となる。

そして最終的には、ソウル教会は第2次世界大戦後の米ソの対立と共に、もともとは同じ教会であったアメリカ正教会の影響下に入り、ソウル教会とロシア正教会との関係は終わってしまう。ロシア正教会朝鮮宣教史のさらなる研究に関しては、今後ソウル教会側の資料やセルゲイ神父の頃の東京教会やアメリカ教会側の資料の報告と研究が待たれる。

ソウル正教会はその誕生時に歴史の厳しい洗礼を受けたが、現在も信者を抱え正教信仰を保っている。

## 注)

- (1) 他の正教会の儀礼との相違点の他に、17世紀になり印刷技術がロシアに入り教会関係の本も印刷されるようになると、長く写本で伝わっていたため写本時の間違いなどに起因する儀礼の不統一がロシア教会内自体にもあることが明らかになる。
- (2) ニコライ神父は、日本の初代ロシア領事ゴシケーヴィチが外務省を通じてシノドに出した司祭派遣要請に基づく募集に応募して1861年に来日した。当時

日本ではカトリックやプロテスタントが布教を開始しており、ゴシケーヴィッチは布教活動のみならず日常の生活態度により日本人や日本にいる外国人にも好ましい印象を与えるような人材の来日を希望していたそうである。(ボズニエーエフ 1912)

- (3) Ивановский, Павел 1904, Никитин, Августин 1998 を参照。
- (4) 派遣する宣教師については、例えば朝鮮人に信仰に基づく家庭生活の見本を示せるように妻帯神父が良いなどの意見が出ていた。
- (5) シノド長ボペドノフツェフは、その在職中には教会行政を徹底的に無力化する処置を行ったことで有名である。彼は 1905 年に失脚するまで、教会法で禁じられていたにも関わらず、主教達を一つの主教座から他の主教座に絶え間無く転任させ続けたシノド長である。
- (6) フリサンフ神父は、聖書や祈祷書の朝鮮語翻訳にも着手している。彼は、朝鮮人が漢字もわかることから、翻訳の助けとなると考え、北京教会に漢字辞典を送ってくれるよう依頼するほど熱心であった。この辞書は義和団事件の混乱のため受け取れなかったようである。結果的には、フリサンフは現在の状況では翻訳は困難と判断し、手をつけられる事柄から実現することを目指している。  
(Перевалов, Феодосий 1926 pp. 193 ~ 195)
- (7) 学校開設直後には、一年生 12 名、二年生 10 名、三年生 7 名、四年生 7 名が学んでいたと記録が残っている。(Перевалов, Феодосий 1926 p. 197)
- (8) このころ、ソウル教会は、イギリス人宣教師や東京在住のユダヤ人や東京のロシア領事館から寄付を受けている。(Дионисий 1999 p. 353)
- (9) セルゲイ神父は 1908 年にニコライ神父の補佐として来日した。若く活躍を期待された俊才であったが、歴史は彼に残酷な仕打ちをした。ニコライ神父が 1912 年に永眠した後、ロシア革命や教会内に生じた不和のためセルゲイ神父は大変苦労した。東京教会長を降りて、第二世界大戦勃発後も日本に残ったセルゲイ神父は、ゾルゲ事件に関係しているとの容疑で投獄され釈放された(高橋 1980) 後 1945 年に永眠する。戦後ソウル教会に残ったポリカルプ神父と同じく、ロシア人神父であるということだけで不幸に遭った神父であるといえる。
- (10) ロシア正教会の朝鮮教会がソウルにあり、このソウルが 38 度線以南であり、戦後アメリカ軍が制圧した地域だったことが、ソウル教会がアメリカ正教会影響下に入る直接の原因となった。この 38 度線での線引きは、単に 38 度線以北が日本軍の関東軍指揮下であり、以南が日本軍第 17 方面軍の指揮下であったという理由で決定された。(「教養人の東洋史下」1990 pp. 190-191) 38 度線以北はソ連軍に、以南はアメリカ軍に降伏させるように決められ、この分断が後の朝鮮戦争へと発展する原因となる。
- (11) Дионисий Поздняев 1999 pp. 360 ~ 362 参照



参考文献

- Волхова, А 1998 : "Из истории российской политики на Дальнем Востоке",  
*История российской духовной миссии в Корее, 1999, pp. 318-350.*
- Дионисий, Поздняев 1999 : "К истории российской духовной миссии в Корее",  
*История российской духовной миссии в Корее, 1999, pp. 351-362.*
- Ивановский, Павел 1904 : "Краткий очерк развития миссионерского дела среди  
корейцев Южно-Уссурийского края", *История российской  
духовной миссии в Корее, 1999, pp. 115-149.*
- История российской духовной миссии в Корее 1999 : Издательство  
Свято-Владимирского Братства, Москва.
- Никитин, Августин 1998 : "Православие у корейцев Забайкалья и Приамурья",  
*История российской духовной миссии в Корее, 1999, pp. 150-170.*
- Перевалов, Феодосий 1926 : "Российская духовная миссия в Корее", *История  
российской духовной миссии в Корее, 1999, pp. 171-317.*
- Черевко, К. Е. 1999 : "Зарождение русско-японских отношений 17-19 века",  
Наука, Москва.
- 「アジア・キリスト教史 1－中国・台湾・韓国・日本」1995 教文館
- 池明観 1975 : 「韓国現代史と教会史」新教出版
- 井上浩一・栗生沢猛夫 1998 : 「ビザンツとスラブ」中央公論
- 植田樹 2000 : 「コサックのロシア」中央公論新社
- 亀井高孝 1991 : 「大黒屋光太夫」吉川弘文館
- 「教養人の東洋史 下」1990 社会思想社
- 黒川知文 1999 : 「ロシア・キリスト教史」教文館
- 五野井隆史 1990 : 「日本キリスト教史」吉川弘文館
- 司馬遼太郎 1995 : 「ロシアについて」文芸春秋
- ゼルノーフ, N (宮本憲 訳) 1978 : 「ロシア正教会の歴史」日本基督教団出版局
- 高橋保行 2000 : 「ギリシア正教」講談社
- 武田幸雄 1985 : 「朝鮮史」山川出版
- 萩原遼 1999 : 「朝鮮戦争～金日成とマッカーサーの陰謀」文春文庫
- 波多野善大 1962 : 「東アジアの開国」人物往来社
- 廣岡正久 1993 : 「ロシア正教の千年」日本放送出版協会
- ボズニエーフ (中村健之助 訳) 1986 : 「明治日本とニコライ大主教」講談社
- 中村喜和 1997 : 「聖なるロシアの流浪」平凡社
- 中村健之助 1986 : 「明治日本とニコライ大主教」講談社
- 「ロシア史 1」1995 山川出版

「ロシア史 2」 1994 山川出版

「ロシア史 3」 1997 山川出版

# The History of Mission Works of the Russian Church (MRC) in Korea

Nobuko SHIMIZU

## Summary

Since MRC in Korea began at the beginning of 20<sup>th</sup> century, many kinds of misfortune befell MRC in Korea. A cause of distress of MRC in Korea was a bad financial condition.

In its long history Russian Tsar forced obedience on the Russian Church, which therefore lost independence. Politicians who paid a big attention to Eastern Asia took the initiative in MRC in Korea from the very beginning. Of course there were some politicians who stood against MRC in Korea, and the disagreement of diplomatic opinions among Russian politicians delayed the start of MRC in Korea. Only 4 years after MRC in Korea started, before they had made the foundation stable, the Russo-Japanese War broke out. Since 1904 MRC in Korea had to stop for 2 years.

After the Russo-Japanese War MRC in Korea began again at once. Korea is very far from the Russian Church in St. Petersburg, and so MRC in Korea, which at first had been controlled by the Russian Church in St. Petersburg, fell under the control of the Russian Church in Vladivostok.

Next to the Russo-Japanese War, it was the Russian Revolution that most affected MRC in Korea. Because of the revolution MRC in Korea lost money from Russian government. Without the money, on which MRC in Korea had been totally dependent, it was very difficult to keep up the mission works in Korea.

After the Russian Revolution MRC in Korea couldn't keep in contact with the Russian Church in Vladivostok because of the civil war, so they fell under the control of the Russian Church in Tokyo.

After the Russian Revolution the head of the Russian Church became weakened. The Bolshevik government, which finished Russian Tsarism, demanded rights to the estate of MRC in Korea, and a church in Harbin, which had diverged from the Russian Church, also demanded rights to MRC in Korea.

Before World War II, the head of the Russian Church in Tokyo was suffering oppressions of Japanese Army, so he made MRC in Korea independent from the Russian Church in Tokyo.

Finally, the Cold War between Russia and America after World War II didn't enable MRC in Korea to return to the Russian Church, but brought it under the control of the Greek Orthodox Church in America, whose foundation was established by mission works of a Russian missionary Veniaminov in the middle of 19<sup>th</sup> century. Therefore MRC in Korea lost any relation with the Russian Church.